

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

XIII. 聖霊に対する罪

使徒行伝 7:37-60

聖霊に関し、このシリーズを通して私たちが学んできたことから見て、聖霊に対して罪を犯すことは何と恐ろしいことであろうか。私たちは聖霊が三位一体の神の第三位なるお方であり、神であることを学んだ。私たちはこの世と聖徒たちへの聖霊の働き、すなわち、彼は助け主として、私たちのそばにあって共に歩くために来たお方であるということ学んだ。彼がいかなるお方であり、何をされるお方であるかということを考えるならば、彼に対して人が罪を犯すことは、ほとんど考えられない。しかし、それが行なわれているのである。



聖霊に対する人間の関係について、**四つの霊的警告**がある。それらの**二つは罪人の行為**について言われたもので、**反抗と冒涇（ぼうとく）**である。あとの**二つは信者の行為**に関するもので、**悲しませることと消すこと**である。

聖霊に対する反抗

ステパノは、ユダヤ人の反逆者の群に対して、彼らが聖霊に逆らっていることを責めながら語った（使徒 7:51）。ステパノはユダヤ人の最高裁判所であるサンヒドリンにおいて、審かれるために連れて行かれたのであった。それは、彼のうちにあったイエス・キリストへの信仰と彼の福音宣教の故であった。これは反対者にとって処理するのに耐え難いものであった。彼らは返す言葉もなく、石をもって彼に答えたのであった。

なぜ、聖霊に逆らう罪がそんなに恐ろしいことであろうか。なにゆえ、それは神の恐るべき審判を受けるにふさわしいものでであろうか。なぜなら、それは**聖霊は失われた人間を神に立ち返らせるための神の代行者であるからである**。聖霊に逆らうことは、溺（おぼ）れている人がロープを拒むのと同じである。それは燃えている家の二階の窓にいる人間が、梯子（はしご）をおりるのを拒むのと同じである。助けと望みの唯一の代行者に反抗し、拒むことは、死のほかにも何ものをも選ぶことが出来ない。そしてこの場合、聖霊に逆

らうことは永遠の死を招くものである。

人間が逆らう方法

ある人々は、**聖霊に耳を傾けない**ということによって反抗する。彼らはただ、聖霊に耳を傾けようとする時間を持たない。余りにも忙しいのである。聖霊について何の関心も持たない。しかし、これは無意識の行為ではない。事実、それは反抗の精神と意識から生ずるのである。

延ばすということは聖霊に逆らうもう一つの巧妙な方法である。聖霊が罪を示そうとする時、聖霊を押しつけづける人は、その迫りの効果を減少させてしまい、ついにはその人が神に従えなくなるのである。

冒瀆の罪

マタイによる福音書 12 章 31、32 節は、**聖霊に対する罪は赦（ゆる）されない**というイエスの宣言を記している。これは最も大きな罪であろう。これは一体、何をさしているのだろうか。

イエスは目が見えない、悪霊につかれた男から、悪霊を追い出したところだった。人々は驚き、キリストを救い主として受け入れようとしていた。しかし、パリサイ人たちは、キリストのわざは悪魔的な力によってなされているのだと言った。マルコによる福音書 3 章 22 節は同じ非難を述べている。

ここに非常に重要な定義がなされている。**聖霊に対するすべての罪は、冒瀆ではないが、聖霊に対するすべての冒瀆は罪である。** 冒瀆とは神に対して、ののしりの言葉を行うことであり、また意識的に悪意をもって、それを行うことである。それが聖霊に対してなされる時は、とくに憎むべきことである。なぜなら、それは罪人を神のもとに導くことの出来る唯一のお方と、人間とを切り離してしまうからである。それは赦されない。それは神が隣みのないお方だからではなく、ここまで来てしまった人は、罪を悲しもうとしない心を持っていることを自ら示しているからである。このような悲しみなくして、悔い改めることは出来ない。

とりあえず申し上げておくならば、今日なお、このような罪は可能ではあるが、比較的少数の人々がそれを犯してきたのである。サタンはしばしば、赦されない罪を犯していると言って人々を悩ませている。その人がこのような事を心配しているということ自体、彼

はそのような罪を犯してはいないということの証明である。

信者もまた罪を犯す

信者もまた聖霊に対して罪を犯すことがある。しかし彼らの罪は異った性質のものである。これらのうちの一つは聖霊を悲しませる罪である。「神の聖霊を悲しませてはならない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである」(エペソ 4:30)。

聖霊が悲しまれるということは、彼が鳩のような性質を持っていることを示している。聖霊は敏感であり(正しい感覚において)、神の栄光と信者の幸福に関して非常な関心を持っておられる。クリスチャンが神の栄光、またはキリストのご目的に反したことや信者の霊的生活を害(そこな)うことをするのを見る時、聖霊は悲しむのである。

聖霊はいかに悲しまれるか

聖霊を悲しませることに関係している聖句のすぐ前のところで、御言葉は「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない」と言っている。私たちは、彼が聖い霊であるということを決して忘れてはならない。例えば、時々、クリスチャンたちは下品な話をくり返したり、またしばしば、ただ遠廻しの言い方で、やわらかく聞こえる、神を汚す言葉を使ったりする習慣に徐々に陥っている。彼らは聖霊が内に宿っていることを忘れていたのである。そのような環境の中に、聖霊はどうしてとどまることが出来るであろうか。

心の罪もまた聖霊のいみ嫌うものである。外に現われた罪を扱うのは容易である。なぜなら、それらは見分けやすいからである。しかし、これら外部に現われるものについて非常に注意深い者たちは、神の前に同様に悪であるところの、肉の働きを心に隠しているであろう。エペソ 4 章において、聖霊を悲しませないように注意深くあれ、という戒めのすぐあとに列挙されていることさらに注意することは、興味深いことである。パウロは「無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また一切の悪意」について語っている(エペソ 4:31)。

あるものは悪い気質や、性質の弱さから生まれる。しかしこれらは明らかに古い性質の一部である。聖霊はこれらのことを悲しむばかりではなく、また私たちがそれらに勝利することが出来るように助けてくださる。

不信仰の霊は聖霊を悲しませる。人間はその友の信頼を望み、また感謝する。神の約束を疑い、こうして神の誠実さを疑うことは、神の栄光と誉れに関心を持っておられるお方を傷つけることである。

聖霊を悲しませることは、恐ろしい結果を生じる。それらの中で最も悪いことは、私たちの生活の中から、聖霊の臨在を失ってしまうことがあり得るということである。聖霊は私たちが罪に陥る瞬間、あるいは完全に墮落してしまう時、私たちを離れるであろう。しかし、聖霊を悲しませるこれらの事を処分するのを拒んだり、無視するならば、私たちは最後には聖霊の臨在を失うことになるであろう。

聖霊を消すこと

テサロニケ人への第一の手紙 5 章 19 節は、「御霊を消してはならない」と言っている。テサロニケ教会はコリント教会の正反対をする、という誤りがあったように思われる。コリント教会の人々は聖霊の現われに関して、その活用について誤っていた。テサロニケのクリスチャンたちは、すべての聖霊の働きを消してしまう危険の中におかれていた。

教会は聖霊が働きやすい環境を作らなければならない。「消す」ということは火を思い起こさせる。火は燃料を外にとり出すか、または焰（ほのお）のための必要な酸素を除くことによって消えるであろう。聖霊が献身という燃料と、祈りという環境のないことを見られるならば、もはや、働くことは出来ない。そして火は消えてゆくのである。

コリント人への第一の手紙の学びの中で見たように、霊の規制を持つことは、集会が秩序正しく持たれるために必要なことである。霊の賜物の働きを評価することは、正しいことである。しかし、一方、聖霊のすべての働きに関するきびしい、批判的な分析の態度は自由な働きに助けとなるものではない。聖霊は快く迎えられ、自由に働くことの出来る環境を必要とするのである。たいていの場合、危険は熱狂的なものよりもむしろ形式主義である。それはどちらも正しいことではなく、聖霊を喜ばせることでもない。私たちは行き過ぎを避けようではないか。そして聖霊の思うがままに働いてもらおうではないか。

昔、エリの時代に、契約の箱は罪のために敵の手に奪われてしまった。エリの嫁がその知らせを聞き、出産で死に臨んでいた時、その子に「イカボデ」と名づけた。その意味は「神の栄光は去った」という意味である。契約の箱は神の臨在の象徴であった。聖霊は実に神の臨在の現実である。聖霊を迎え、喜ばせることによって、いつも私たちの中にその栄光を保とうではないか。